

7．具体化に向けての課題

(1)堰横魚道

維持管理について

堰横魚道は、流入部をオリフィス構造とし、魚道内に流木やゴミ等が入りにくくするとともに、プール内に潜孔を設けて土砂の排出を促すなどの工夫をしているが、ゴミや土砂の流入状況によっては、魚道の機能が大きく損なわれる場合もあることから、魚道内の点検と、必要に応じてゴミ等の搬出など適切な維持管理が望まれる。

堰横魚道直下の新水路内の滯筋確保

魚道から本川合流までの新水路内の滯筋が変動し、瀬切れなどにより魚道までの流路が損なわれる恐れがある。そのために、洪水後の点検と、必要に応じて流路の確保を行う必要がある。

洪水後の迷入魚類について

サケ遡上期は、堰横魚道に通水しないために、洪水終了後分流堰ゲートが閉じた後は、新水路に入ってきたサケ等の魚類は上流に遡上することができなくなる。このような場合、流量の減少に応じて魚類が下流に移動し、十勝川本川にもどる個体も多いと考えられるが、一方で、新水路内の水たまりに迷い込んで留まることも想定される。そのような状態を回避するための方策を検討することが必要である。

たとえば、洪水後に堰横魚道に通水し、サケ等の魚類を魚道に誘導するとともに、サケについては魚道内に捕獲用トラップ等を設置して採捕することが考えられる。この場合、通水・採捕という作業が不可欠で、そのための調整が必要となる。

魚道観察窓の検討

他地区の魚道では、観察施設を設けて環境学習等に使われている例も見うけられる。この地区の利用方針によっては、観察施設の検討を行い、維持管理を含めた設置の可能性について調整を図ることが望まれる。

(2)高水敷魚道

維持管理について

高水敷魚道は、流入部をオリフィス構造とし、魚道内に流木やゴミ等が入りにくくするとともに、水路部は蛇行形状を持たせた多自然型とし、ゴミ等の流入や魚道水路の変化に比較的強い構造を提案している。しかしながら、洪水時の大量のゴミ等の流入や流水による侵食の程度によっては、魚道の機能が大きく損なわれる場合もあることから、侵食に耐えうる水路構造とすることや洪水後の魚道内の点検などを行う必要がある。

魚道入口の確保

魚道入口の位置は、経年的に澁筋が安定して淵である場所として提案している。しかしながら、新水路の完成後には、洪水時の流況が今までとは大きく異なるために経年的に安定したこの位置の河道状況が変化する恐れがある。このため、洪水後に魚道入口周辺の状況を点検し、魚道機能を確保する必要がある。

イトヨの遡上に配慮した魚道整備

高水敷魚道の対象魚である小型遊泳魚、特にイトヨは、他の魚類に比べて遊泳力が小さいことから、水際部の玉石や植生及び河床部への玉石の配置など、流れの緩やかな場所の創出に配慮する必要がある。

捕獲期におけるサケの迷入防止

産業の保護育成の観点から、当面は、サケ捕獲期には高水敷最下流部に迷入防止施設を配置してサケが魚道内に入らないよう、今後迷入防止施設の構造等について具体的な検討をする必要がある。

高水敷利用計画との調整

高水敷魚道の平面形状については、魚道機能を確保した上で、地元による高水敷利用計画との調整を図り、地域にとってより有効な魚道となることが望まれる。

工事中の施工指導・評価

高水敷魚道の多自然型水路・休息プール等が、魚類生態上、遡上に対して効果的な施設となるように、施工時において専門家からの指導及び助言を得ることが望まれる。

(3) その他

水質状況の把握

堰上流の湛水区間及び新水路下流部の本川背水区間は、流水が滞留しやすい状況にある。水質が悪化すると魚の遡上に影響を及ぼす恐れがあるので、今後、水質状況の把握をしていくことが望まれる。

鳥対策

高水敷魚道では待避プールの設置等アオサギからの捕食対策を提案しているが、今後その状況を確認する必要がある。

上述の諸問題があるが、魚の遡上状況などについてモニタリング調査を行い、必要に応じて検討を行うことが望ましい。